

私の本棚

岩石記載の教科書

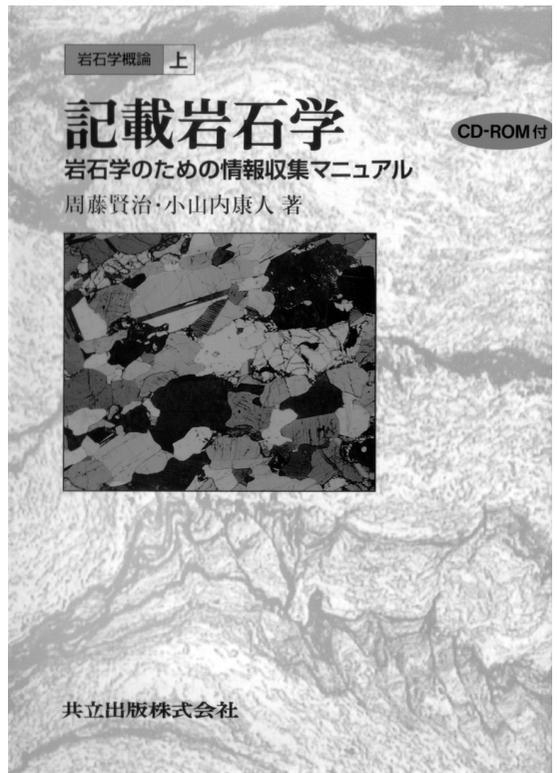
現役引退もほど近い私のような世代が大学で岩石学を学んだころの教科書で定番だったのが、都城・久城による『岩石学』全三巻(1972, 共立全書)でした。それより少し若い世代だと、黒田・諏訪の『偏光顕微鏡と岩石鉱物[第2版]』(1983, 共立出版)になりました。どちらもバイブルですが、学部学生用の教科書という性格は明らかで、必ずしも取り付き易いとはいえません。カラーのページが前者はなく、後者でもレターデーション用と顕微鏡写真6枚の2ページがあるだけで、それ以外は白黒のみとなっています。

初学者(あるいはブランク者)にとって見掛けはやはり大事なので、当時はカラーページ満載の下記のような図録(Longman 刊)を同時に参照していました。MacKenzie and Guilford『Atlas of rock-forming minerals in thin section』(1980), MacKenzie, Donaldson and Guilford『Atlas of igneous rocks and their texture』(1982), Adams, MacKenzie and Guilford『Atlas of sedimentary rocks under the microscope』(1984).

写真を見てわかったつもりになってしまう弊害はあるものの、何の手がかりもつかめなくて茫然とするのを回避できる効用があります。さらには、見たことの無い岩石(組織)への好奇心を掻き立てる役割を果たすともいえます。

そうこうするうちに時代の流れはカラー写真の大量供給を可能にしました。周藤・小山内の岩石学概論上『記載岩石学』(2002, 共立出版)は白黒印刷ですが、写真が全てCD-ROMにカラーで収められており、一昔前の何冊分かと思われる内容です。「岩石学のための情報収集マニュアル」との副題に示されるように、いかにして岩石から情報を引き出すかに力点が置かれていますので、目的に応じて観察・記載・分析の基礎を学べます。また、下巻は『解析岩石学』(2002, 共立出版)となっており、成因的な解析を発展して学ぶこともできます。

しかし現実的には、大方の技術者(の卵?)や一般



の方々にとって、岩石を薄片(プレパラート)にして偏光顕微鏡で観察する機会は少ないでしょう。事実、岩石の記載は肉眼観察が基本ですし、現場的にもそうでしょう。もちろんルーペは必需品ですが、コブシ大の新鮮な岩石を見分けるのに役立つのは、ハンディな図鑑:たとえば豊・青木の『鉱物・岩石』(1996, 保育社)かもしれません。ただ、名前を付けるだけの作業で終われない鍵となるような岩石を見落とさないためにも、多くの実際の岩石に接し、可能な限り顕微鏡写真とクロスオーバーさせて経験智を積んで欲しいと思います。そのことにより、目的に応じた岩石記載の着眼点が養われていくことを期待します。

(産総研 北海道産学官連携センター/
地質情報研究部門 中川 充)